跡見学園女子大学紀要　第二十八号（一九九五年三月十五日）

〝ラ抜き言葉〟

――本学学生の意識――

遠藤潤一

要旨

本稿は平成五年十一月に、受講学生に対して、いわゆる「ラ抜き言葉」すなわち「見れる」等の動詞についての意見を書かせた課題についてまとめ、考察を加えたものである。

全体を四章に分けるが、まず、第一章はその課題の意図・性格についての説明である。次に、第二章は学生一八七名の意見の分析その一で、「ここだと見られないね」という文を、助動詞「られる」の「可能」の意味でとらえるのが日常的に自然か、それとも「受身」の意味でとらえる方が自然か、という点についての意見のまとめである。この問いから、「ラ抜き言葉」の「見れる」が誘導されるのである。第三章は「ラ抜き言葉」についての意見のまとめである。まず、分析その二として，学生が「ラ抜き言葉」に対してどのような態度を示しているかについてまとめる。次に、学生の意見の中から、「ラ抜き言葉」を容認する、容認しないにかかわらず、理由を明示して論述している意見を抽出して分析し、実際にそれらの意見を主旨別・学年別に掲げる。これは一〇四名となる。第四章は本稿のまとめで、意見を書いた学生たちを読者と想定して、「ラ抜き言葉」に対する観点について、多角的に述べようとしたものである。また、この課題についての筆者自身の反省も含まれている。

言語は本来変化するものだから、時間がたてば形がかわり、意味も変化する。《略》しかし、その変化は段階的であり、またその各段階で一定の傾きをもっている。それは言語学的にみてどうにも説明のつかないような方向に進むことは少なく、一般に変化しうる枠が自ずからあたえられている。そこに、継承されていく言語形式の同一性への保証がふくまれている。

（風間喜代三著『言語学の誕生』より）

一　学生への問いとその意図

本学の学生に左記のテーマで文章を書かせた。

〝ここだと見られないね〟

この文から二通りの意味（A・B）を引き出し、この表現からすると、そのどちらの意味が自然かという点について述べなさい。

「ラ抜き言葉」という語を使うこと。（字数は自由）

補足として、「ここだと」の下に「――が」、「――から」などの言葉を入れて考えてみればよいということ、「自発・可能・受身・尊敬」という語から適当なものを使うとよいということ、また、「ラ抜き言葉」という語を文章の題名としてもよいということなどを述べた。

この課題はまったく予告無しに出したものである。前もって「ラ抜き言葉」について話してあったわけではない。それ故、不必要かとも思ったが、補足として右のような説明を加えたのである。また、学生になるべく論点を締ってもらいたかったということもある。

この課題の意図するところについて述べると次のようになる。すなわち、「ここだと見られないね」からは、次の二通りの意味が引き出せる。

A　ここだと（パンダが）見られないね。（助動詞「られる」の「可能」の意味）

B　ここだと（人から）見られないね。（助動詞「られる」の「受身」の意味）

※Aを「可能」、Bを「受身」にしなければならないということはない。この順序は学生の自由。

そして、そのどちらが日常的に自然な表現かということになれば、それはBの「受身」ということになるだろう。Aの「可能」は日常的には不自然な表現ということになり、それは、

A'　ここだと（パンダが）見れないね。

と、いわゆる「ラ抜き言葉」を使って、「――見れないね」と表現するのが日常的には自然な表現であるということになるからであろう。

そして、次に、この「ラ抜き言葉」が論述の問題となり、これがこの課題のテーマとなるわけなのである。

右の課題はこのような誘導によって「ラ抜き言葉」について論じさせようとしたものなのである。「られる」の「受身」との対比をまず第一の観点とさせ、第二・第三等々の観点は学生の自由にまかせようとしたものなのである。「見れる」を挙げて論じさせようとしたのは、この語が「ラ抜き言葉」の先駆的存在の一つであり、その意味で「ラ抜き言葉」の代表格と言えるものの一つであるからである。「見れる」「来れる」はよいが、「食べれる」「出れる」はだめ、というような議論が聞けたらとも思ったのである。また、この「見れる」には、一方には「見える」という語があり、「見れる」と「見える」の表現上の違いをどのようにとらえているかということも見たいと思ったからである。

二　「られる」の「可能」が自然か、「受身」が自然か

さて、学生の文章を回収して調べたところ、人数は、一年生八七名・

二年生四八名・三年生四五名・四年生七名、計一八七名であった。時間は四十五分ほどであった。その間に、かなり質問が出たが、その内容に合わせて適当な示唆を与えた。「可能」と「受身」の対比についても示唆を与えた。

「ラ抜き言葉について跡見学園女子大学の学生一八七人に聞きました」という結果は、まず〔表一〕のようになる。この表は「ここだと見られないね」という言い方について、「受身」の表現・「可能」の表現のどちらが日常的に自然か、という問いに対する回答をまとめたものである。

〔表一〕 受身が自然か・可能が自然か

学年	人数	①受身を自然とした者	②受身を自然としなかった者（可能の「られる」との比較で、ラ抜きを自然とした者）	③可能を自然とした者	④その他
1	87	77 88.5	10 11.5	0	0
2	48	43 89.6	4 8.3	0	1 2.1
3	45	34 75.6	10 22.2	0	1 2.2
4	7	7 100	0	0	0
計	187	161 86.1	24 13.4	0	2 1.1

〔表一〕について説明すると、まず、表の項目②の「受身を自然としなかった者」がいたということは、これらの学生は問題を取り違えたのである。つまり、「可能」の「見られないね」とラ抜きの「見れないね」とを直接比較してしまい、その結果、ラ抜きの「見れないね」の方を「自然である」と答えた学生たちなのである。他に、「受身」の「見られないね」よりもラ抜きの「見れないね」の方を「自然」とした学生が若干含まれている。なお、項目④の「その他」二名中の一名は「見れないね」でなく「見えないね」で問題を論じた者、他の一名は文章の論旨が不鮮明で、どちらを自然としているかが読み取れなかったものである。

結果的に、項目③で「可能」の「見られないね」を「自然」とした者はだれもいない。予想していたことではあるが、注目したい。学生一八七名中の一六一名、八六％が「受身」を「自然である」と答えているということになる。学生のなまの意見を一例選んで掲げてみよう。

B（可能）の場合、現在では「ここだと見れないね」というういわゆるラ抜き言葉で表現されることが多く、「ここだと見られないね」は、こちらの方が日本語として正しいにもかかわらず、人々に違和感を感じさせる。（4年生）

ここで、学生が「ここだと見られないね」から二通りの意味を引き出すために、「ここだと」の下または上に補った言葉に言及してみると、それらはさまざまであったが、「可能」の場合は、「ここだと（舞台が）見られないね」のように、「舞台が」を補った者が三一名いた。次に、

「テレビが」「画面が」「テレビの画面が」「映画が」などが多かった。「黒板が」を補った者もいた。

また、「受身」の場合は、「人から」を補った者が三九名いた。次に、「人に」「誰にも」が多く、「先生から」「先生に」を補った者が一〇名以上もいたことは、本題から外れることではあるが、興味深いことである。

また、「ここだと（人から）見られないね」を受身の表現であるとしながらも、本来なら「ここだと」よりも「ここなら」を使うのが自然である等々と述べている者もいた。「可能」「受身」両方の意味が導き出せるように工夫して、「ここだと見られないね」という文を作ったのであるが、両者を別々にして考えれば、そのような疑問が生ずるのも当然であろう。「可能」の場合なら、「ここだと」よりも、「ここでは」「ここじゃあ」などの方が自然ということになろう。つまり、「ここでは舞台が見られないね」、「ここなら人から見られないね」とあるべきだ、というわけである。

また、「可能」の「見られないね」に対して「見れないね」が一般的・日常的であると述べている者の中で、ラ抜きの「見れる」は問題視されている語だから、「見える」を使えばよいという述べ方で、「見える」をも掲げている者が、一年生三名、二～四年生に各一名、計六名いた。しかし、たとえば、「動物園にパンダを見に行く――パンダが見れない」という思考からすれば、「パンダが見えない」は直接出て来ないか、出にくいはずである。ほとんどの学生が「見れる」だけを挙げて論じている。なお、同様の見地から、「見れる」を使わずに、「見ることができない」という表現を使えばよいと述べている者が、一年生一名・二年生三名・三年生一名、計五名いた。

以上であるが、この導入の問いでは、「られる」の「受身」の方を「自然な表現」とした者が約八〇％、「可能」を「自然な表現」とする者はだれもいなかったというわけである。「ラ抜き言葉」という語を文章の題名とした者は一八三名（九九・九％）であった。

三　「ラ抜き言葉」についての学生の意見

次に、この課題で筆者が最も期待した、学生の「ラ抜き言葉」についての意見をまとめてみることにしよう。

それは、まず〔表二〕のようになる。「ラ抜き言葉」について、容認するか、否定するか、いずれかの方向で言及している者は一八七名中の一四五名（七七・五％）であった。学年別に見ると、一年生は八七名中の七一名（八一・六％）、二年生四八名中の四三名（八九・六％）、三年生四五名中の二八名（六二・二％）、四年生七名中の三名（四二・九％）となる。二年生が最も積極的に言及していると言える。なお、この「ラ抜き言葉」についての学生の意見は、容認・否定いずれにしろ、理由を付して論述している者だけではなく、理由を付さないで述べている者も入れてある。

〔表二〕 ラ抜きについての意見を述べた者

学年	1	2	3	4	計	①＋④対③
人数	71	43	28	3	145	
①ラ抜きに肯定・容認の意見を述べた者	46 64.8	26 60.5	19 67.9	1 33.3	92 63.5	123 84.8
②上の①の意見の中で、ラ抜きは受身との区別ができて合理的という意見を述べた者（①の人数中の％）	(19 41.3)	(16 61.5)	(7 36.8)	(1 100)	(43 46.7)	
④可能はラ抜きが正しい表現である等、極端に主張する者	13 18.3	9 20.9	7 25.0	2 66.7	31 21.4	
③ラ抜きに否定的な意見を述べた者	12 16.9	8 18.6	2 7.1	0	22 15.2	22 15.2

この〔表二〕のように、「ラ抜き言葉」を容認する者が項目①で、それは一四五名中の半数を越える九二名（六三・五％）である。その中で、「ラ抜き言葉」は「可能」と「受身」の区別のためには有効であるという方向で意見を述べている者が四三名いる（項目②）。これは、項目①の中の四六・七％、全人数一八七名の二九・七％を占める。学年別に見ると、二年生が多いことになる（四年生は一名のみだから除外した）。

また、以上の意見とは別に、「ラ抜き言葉」を、誤った表現ではなく新しい表現であるとし、正当化しようとする傾向の積極的意見を述べた者が項目④で、三一名（二一・四％）いる。この意見は〔表二〕の項目②「受身を自然としなかった者」、すなわち「受身」の「――見られないね」に目を向けず、「可能」の「――見られないね」とラ抜きの「――見れないね」を直接比較し、ラ抜きの方を自然な表現とした者がほとんどである。

以上の合計一二三名（八四・八％）が、「ラ抜き言葉」をなんらかの意味で容認する者ということになる。

一方、「ラ抜き言葉」を否定視する者は二二名（一五・二％）である。

以上の総計一四五名（七七・五％）が「ラ抜き言葉」に対する態度を示しているということになるわけである。残りの四二名（二二・五％）はこのような態度を表明していない。たとえば、第二節で掲げた四年生の意見は、「可能」が「ラ抜き言葉」で表現されることが多いため、「見られない」（可能）が人々に違和感を与えるという主趣で、そのことは実にもっともなことではあるが、「ラ抜き言葉」そのものに対する意見は述べられていないことになる。

さて、次に、学生の「ラ抜き言葉」についてのなまの意見を掲げてみようと思う。

以下に掲げる意見は、〔表二〕の中から、「ラ抜き言葉」を容認するにしろ、否定するにしろ、その理由を述べている者、述べていると認めてよいと言える者を抽出してみたのである。〔表二〕における意見の総数は一八七名中の一四五名であったが、以下に掲げるのはその一四五名中

の一〇四名ということになる。この「ラ抜き言葉」についての課題の意図に応えていると言えるのは、これら約一〇〇名と言ってよいだろう。

意見は、主旨にそって次のように分類した。

a　ラ抜き言葉を、「可能」「受身」の区別に有効であるという点を指摘し、容認しようとする意見（二三例）

b　ラ抜き言葉を、言葉の歴史的変化という観点でとらえ、容認しようとする意見（二六例）

c　ラ抜き言葉を、その一般化している現実という観点からとらえ、容認しよう、容認せざるを得ない、とする意見（一九例）

d　ラ抜き言葉を、a～cのいずれかの面について述べながらも、結論的には否定しようとする意見（一三例）

e　ラ抜き言葉を、日常の言語生活という観点でとらえ、a～cの意見よりも積極的にラ抜き肯定の筆致で、ラ抜きを正当化しようとする傾向の意見（二三例）

以上のように、〔表二〕の場合よりも細かく分類してみた。それで、〔表二〕との関係について述べると次のようになる。

まず、〔表二〕の項目①「ラ抜きを肯定・容認する意見」は右の分類のa・b・cに該当し、②「①の中で、ラ抜きが受身・可能の区別に有効とする意見」は直接的にはaに該当することになる。しかし、b・c・dにも②に該当する者が含まれている。つまり、主旨とは別に、「ラ抜き言葉」が「受身」「可能」の区別に有効であるという点にも言及している者が含まれているということである。

次に、〔表二〕の③「ラ抜き否定の意見」はdに該当し、④「ラ抜き正当化の意見」はeに該当する。このeについて言及すると、a・b・cの意見の中にも「ラ抜き」を正当化するeの傾向の意見が含まれている。しかし、それらはそれぞれa～cの理由付けを主旨としている意見なので、このeには入れなかったのである。eには〔表一〕の項目②「可能の「られる」との比較でラ抜きを自然であるとした者」に該当する者が多い。

〔表三〕　意見に理由を付している者

学生	1	2	3	4	計	a～e対d
人数	50	34	18	2	104	
a・容認	12 24.0	8 23.5	2 11.1	1 50.0	23 22.1	91 87.5
b・容認	10 20.0	10 29.4	6 33.3	0	26 25.0	
c・容認	11 22.0	6 17.6	2 11.1	0	19 18.3	
e・正当化	11 22.0	5 14.7	6 33.3	1 50.0	23 22.1	
d・否定	6 12.0	5 14.7	2 11.1	0	13 12.5	13 12.5

なお、学生の意見のすべてを右の分類a～eのいずれかで処理したので、少数ではあるが、その分類項目に所属させる理由が多少あいまいな感じのするものが出てしまったが、それはやむを得ないこととしたい。

筆者としては、文脈をたどってその理由をなんとか引き出し、その分類に所属させたつもりである。

また、右の分類に従って表を作成すると〔表三〕のようになる。

「ラ抜き言葉」を容認するか、否定するか、いずれかの方向で言及している〔表二〕の人数との比較をしてみると、以下の人数、すなわち意見の中で理由をも述べている〔表三〕の人数は、〔表二〕の一四五名中の一〇四名（七一・七％）である。学年別に見ると、一年生は七一名中の五〇名（七〇・四％）、二年生四三名中の三四名（七九・一％）、三年生二八名中の一八名（六四・三％）、四年生三名中の二名（六六・七％）となる。ここでも二年生が最も積極的と言える。

また、〔表二〕では、一四五名中、容認が一二三名で、八四・八％であったが、〔表三〕では、一〇四名中、容認が九一名で、八七・五％となる。

ところで、以下に掲げる意見は学生の文章から抜き出した部分なので、その文中のA・Bの符号の下に、文章全体の文脈をたどり、それらの符号が「られる」の「可能」「受身」等を指すということを、括弧して補筆した。また、「ラ抜き言葉」という語の表記は上記のように統一し、いちいち括弧は付さないことにした。他にも、たとえば「誰」「だれ」を「誰」にするなど、表記を統一したところがある。文章の読点の打ち方はさまざまなので、これも筆者の観点で統一化を図った。誤字は訂正した。しかし、文法上の認識についての不備な点、論理上やや不備な点など、内容面では手を加えてはいない。

それでは、以下、意見を主旨別に、一年生から順に掲げる（もちろん無記名で。——線部分は分類の根拠とした箇所）。冒頭の番号は通し番号（1～104）である。以下が、名実ともに「ラ抜き言葉について一〇〇人に聞きました」と言えることになるだろう。

〔学生の意見〕——抜き出した部分——

a　ラ抜き言葉を、「可能」「受身」の区別に有効であるという点を指摘し、容認しようとする意見（二三例）

〔一年生〕

1　可能の表現を「見れる・見れない」と言っているため、Aの表現（「舞台見られないね」）が不自然と感じるのです。本来は「見られる・見られない」と言うべきなのですが、最近ではこのような表現を使う人は少なくなっています。特に、若い人たちは、このラ抜き言葉を使う傾向があります。正しくない表現のしかたではありますが、使い分けることによって、意味（可能か受身か）がはっきりしてくるので、この表現も悪くないかもしれません。

2　ラ抜き言葉は正式な言葉遣いではなく、しばしば非難されるが、AとB（可能と受身）の様な時に、意味を区別するのには大変言葉の意味をわかり易くしていることもあるのだ。

3　ラ抜き言葉は一般的には非難されていますが、その表現を用いた方が、その意味の区別（可能の意味かどうか）がはっきりとつきます。で

すから、普段あまり使われなくなってしまった表現を用いたA（られる・可能）よりも、B（られる・受身）の方が自然であるのです。

4　ここで登場するのがラ抜き言葉である。Aを「ここだと見れないね」とすればどうであろう。これらの方が率直に意味が伝わり、自然である。ラ抜き言葉が浸透する理由はこのようにまぎらわしい言葉（受身と可能）を人に伝えやすくするところにあるのだろうか。

5　最近、若者の間でラ抜き言葉なるものが使われだし、「見られない」は「見れない」と使われているが、まぎらわしさ（受身か可能か）の解決、正確な意味の伝達として、多少の言葉の変化もやむをえないと思われる。

6　本来、A（可能）は、「ここだと掲示が見れないね」になるのではないか――新聞ではラ抜き言葉を若者の傾向として非難していたが、私は、この誤解されやすいA・Bの違い（受身と可能）を人に受け入れやすくするためには、ラ抜き言葉大歓迎というところではないかと思う。

7　しかし、現代の日常会話にはラ抜き言葉というものがごく自然に使われている。これは一部の専門家などからは非難されがちだが、実際に可能の意味の表現としては、「見られる」「食べられる」などよりも、「見れる」「食べれる」の方が相手に意味がすぐ通じるだろう。

――いつからラ抜き言葉というものが使われるようになったかは知らないが、私は一つ一つの言葉に何通りもの意味があるよりも、ラ抜き言葉を使うことによって、区別（受身と可能）をはっきりさせた方がむしろ良いのではないかと思う。

8　多くの人が「見れる」「食べれる」「寝れる」など、ラ抜き言葉を使う。そのような言葉は本来存在すべきではないとわかっていても、ついラ抜き言葉を使ってしまう。AとB（可能と受身）を区別するためにも、その方が便利である。

9　ラ抜き言葉は間違った言葉遣いなので、非難されている。確かに正しい日本語ではないが、右のような場合、意味の違い（可能・受身）をはっきりと表すためには、ラ抜き言葉はかえって便利なのではないか。子供を中心にラ抜き言葉が広まりつつある今、考え直す必要があると思われる。

10　ラ抜き言葉というのは、「見れる」「食べれる」のように、〝ら〟を抜いた形で表した言葉だが、この言葉からはA（可能――ここだとなべおさみ見られないね）の意味しかとることができない。このラ抜き言葉は必要の上に成り立つ言葉であり、一概に否定できるものではない。

11　日本語の乱れが声高に叫ばれる中で、その代表とも言われるラ抜き言葉だが、可能の意味をより手軽に伝えられる言葉として認められても良いのではないだろうか。

12　ラ抜き言葉の表現はしばしば世間から非難されるが、表現をわかりやすくするためには、絶対に使ってはいけないと言いきれない。

〔二年生〕

13　そこで、最近議論になっているラ抜き言葉を見直してはどうか。一つの言葉で二つの意味が生じるのもややこしいし、誤解も生じる。A

の「ら」を抜いても、Aの言葉の可能の意味もそこなわれず、Bの言葉との違いも明確になる。そういった意味からいえば、ラ抜き言葉を一概に悪いとは言えないのではないだろうか。

14　ラ抜き言葉は本来正しくない語法ですが、多くの人が使うことによって、一つの例として成り立ち、この場合では文章の意味を判別すること（可能か受身か）に役立ってしまっています。

15　日本語がくずれてきているといわれ、あまり評判のよくないラ抜き言葉であるが、この場合には、ラ抜き言葉を使うと二つの意味（可能と受身）の違いが容易につく。――ラ抜き言葉もなかなか捨てたものではないのではなかろうか。

16　ラ抜き言葉は一般的に非難の目があるが、可能を表現しているとはっきりわかる表現であり、受身の表現と区別ができて便利なものであると言うことができるかもしれない。

17　ラ抜き言葉は日本語を乱していると非難されていますが、Bの場合（受身）と区別がつき、ラ抜き言葉の方がわかりやすい表現といえるでしょう。

18　ラ抜き言葉は非難の対象になりますが、ラ抜き言葉には一定の規則があり、可能を表す時にのみラ抜き言葉になります。意味の違いを明確にするにはラ抜き言葉は便利である。

19　ここで提案なのだが、ラ抜き言葉を見直してみてはどうか。まぎらわしい「ラ」を抜くことによって、「――れる」という、受身ではなく自分を主体にした明確な表現が可能になると思うのだが。

20　可能の表現の際は「れ」（「られ」ではなく）を使ったほうがわかりやすい。ラ抜き言葉も悪い面ばかりでなく、良い面もあるのだ。

〔三年生〕

21　ラ抜きの表現は、これら二つの表現（受身と可能）を区別するには適当な方法である。

22　最近、ラ抜き言葉が問題視されていますが、このように（可能・受身の区別がつくと）考えると、「見れる」を可能動詞として認めても良いのかもしれません。

〔四年生〕

23　A（可能）の方は「見えないね」か「見れないね」とするべきであろう。――最近の若者はラ抜き言葉しか話さない、と言われるが、抜いた方が意味がより明確になることもあるのである。

b　ラ抜き言葉を、言葉の歴史的変化という観点でとらえ、容認しようとする意見（二六例）

〔一年生〕

24　しかし、現在一般には「られる」の「ら」を抜くラ抜き言葉を使う傾向がある。文法的に間違っていると批判されてはいるが、言葉は時代の流れで段々と変化しているものだから仕方のないことだ。そこから考えると、「可能」でとる意味の言葉は「見れない」と使う方が自然である。

25　私は、ラ抜き言葉は使われてもいいのではないかと考えている。古典文学を振り返れば分かるように、言葉は時間の経過と共に変化していくものである。そのような自然の流れを止めることは誰にもできないであろう。

26　このラ抜き言葉に慣れてしまった私たちは、Aの文（ここだとスクリーンが見られないね）を何となく不自然に感じてしまうようになってしまった。日本語の乱れが指摘されて久しいが、これは時代と共に変化した、進化した言葉ともいうべきか。

27　ラ抜き言葉というのは実際正しい言葉の使い方ではなく、年配の人達などは非難することまである。しかしながら、言葉はこのように昔から変化し続けてきたものである。一般的にラ抜き言葉が使われるようになった今、認められてもいいのではないだろうか。

28　日常私達は「見れない」というラ抜き言葉を用います。本来、ラ抜き言葉というものは正しい表現方法ではありません。でも、受身と可能の意味を区別する方法としては非常に有効であるし、私達の会話の中に根づいているのです。このように、表現というものは、自分達が用いやすいように、だんだんと変化してきているのです。

29　文語であればともかく、会話ではいわゆるラ抜き言葉を私達は用います。これは最近、正しい日本語でないと、しばしば非難されています。しかし、ラ抜き言葉を用いれば、A・Bの意味（可能・受身）が容易につくし、一般的に用いられているのなら、それは新しい文化として受け入れるべきではないでしょうか。新しい文化を築くには、昔の形式を変えていくのは必至です。ラ抜き言葉、これは私達が築いた文化の証明の産物になるかもしれません。

30　ラ抜き言葉は若者の言葉の崩れだと非難する声もあるようだが、一方ではラ抜きによって意味が明確になる（可能の意味がはっきりする）といった考え方もできるのではないだろうか。ラ抜き言葉が定着すれば、又新しい言葉の変遷が始まることになる。

31　B（可能・ここだとテレビみられないね）も文法上は間違いではないのだが、どうも不自然な感じがするのである。それは、今日、私達が「見れない」といったような「ラ」を抜いた言葉を日常使っているからである。このように、話し言葉というものは、日々変化しているのである。

32　何かとラ抜き言葉は言葉の乱れだなどと言われ、非難されやすいが、言葉の変化とみていいのではないか。今やラ抜き言葉は深く浸透してきているのだから。

33　現在、Aの言葉遣い（見れない）は年配に否定されている。正しい言葉遣いではないというのである。しかし、若者の間から生み出されたこのラ抜き言葉は、一般に用いられることが多くなってきているのも事実である。言葉は日々進化しているという。ラ抜き言葉が使いやすいのならば、それを用いても良いのではないだろうか。

〔二年生〕

34　ラ抜き言葉が多く使われるということは日本語の乱れにつながると叫ばれて久しいが、このように一つの言葉から二つ以上の意味が考え

られる場合（「られる」の受身と可能）には、その意味の区別を音ですることにより、瞬時に違いを判断でき、効果的だと思う。言葉とは時代の流れと共に変わるものであり、全てが言葉の乱れにつながるとは考えにくいものである。

35　ラ抜き言葉は日本語の乱れとして非難する人もいますが、言葉は時代とともに変化するもので、この言葉も定着しつつあります。表現の区別（可能と受身）としてわかりやすいので、よいのではないでしょうか。

36　ラ抜き言葉は正しい日本語でないとか、文法的に間違っているとか言う人がいる。しかし、私はラ抜き言葉を悪いとは思わない。同じ日本語でも、平安時代のものと今とでは、文法も違えば単語の意味までも変わっているのだ。とかく新しい言葉は否定されがちだが、A・Bの意味（可能と受身）をはっきり分けるのにも、ラ抜き言葉は有効ではないか。日々、社会が動いているように、日本語も変化しているのだ。私達はそのことを認識しなければならないと思う。

37　ラ抜き言葉を使うと、Aの「ここだと舞台が見られないね」が「ここだと舞台が見れないね」となり、可能の意味がはっきりと出てくる。そこで、最近ではこのラ抜き言葉が一般的になりつつある。――時代を経るにしたがって、文法というものも、〝人に伝える〟ということに重点をおき、変化をしていくものだ。

38　文法的にいえばラ抜き言葉は間違いかもしれないし、たびたび新聞やTVなどで取りあげられ、指摘されている。けれど、Aの場合（可能）でいえば、「見れない」の方が意味が通りやすいし、何より世間で多用されて、一つの言葉として成り立っていると思う。間違いであると指摘し続けるより、言葉は常に流れて変わっていくものだから、新しい使い方として受け入れてもいいと思う。

39　現在の言葉の変化の一つとして、ラ抜き言葉の定着がある。これは、非難はされつつも、日本語として確実に定着してきており、――。

40　言葉は時代と共に変わるもので、正しいものはずっと正しいとは限らない。今日、問題となっているラ抜き言葉も、柔軟な考えで対応してもらいたいと思う。

41　しかし、ラ抜き言葉は文法上、誤りなので、新聞・TVなどで批判されている。だが、批判されてはいるものの、これを改革することは困難であろう。そもそも言葉は生きものであるのだから、時代時代で変化していくことは、むしろ自然なことと言えるだろう。

42　近年においては、可能を表現する時は、ラ抜きの方が意味が通じやすいのではないか。食べれない等。ただ単に「本来の日本語は……」となげくのではなく、その時代に合った言葉で話す事も大切なのではないか。現代のコミュニケーションに於いては、可能を表わすラ抜きも重要な文法になりつつあるのではないか。

43　ラ抜き言葉をなげく声が良く聞かれる様になったが、可能を表わす言葉は、「食べれない・着れない」の方が現代のコミュニケーションではわかりやすかったりするのが現実だ。その時代に合った言葉を使っていっても良いのではないか。

〔三年生〕

44　なにかと批判の多いラ抜き言葉だが、こうしてみると（受身・可能の区別が明瞭）、メリットもあるものである。あまり厳密にとがめることなく、時代にマッチした言語表現を使用してゆくべきだと、私は考える。

45　現代の日本語は文法通りに使うとかえって理解しにくかったりする。前述したAの例、つまり可能の「られる」では、文法マニュアル通りよりも、ラ抜き言葉のようにルーズに使う方が理解し易い場合もある。時代に流される日本語の「文法通り」が「誤用」となる決定的瞬間を、私達は見ることができるかもしれない。

46　時として、ラ抜き言葉と非難されることもあり、耳にすることもあるとは思うが、「――何も見れないね」という表現である。文法上、――「られる」が正しい。しかし、これを正すことは誰にも出来ない。これは日本語の変化の一端なのではないか。古語から現代日本語へ変遷をくり返してきたように、これもその一端なのではないだろうか。

47　ラ抜き言葉は文法的に誤りで、近年特によく使われることから、年配の方などが指摘しているが、言葉というものは生きているものなので、時代と共に変化するものであるから、いつの日かラ抜き言葉が文法上正しくなる日がくるかもしれない。

48　以前、新聞でこのこと（ラ抜き言葉の流行）が問題にされ、たくさんの人々（特に国語学者や老年の方々など）に批判されていた。若者の言葉が乱れており、それが一般化していることを嘆いていたのだ。しかし、私は、時代の流れとともに言葉の使い方が変わっていくのはやむを得ないこと、また必然的なものと考える。こういった表現の変化はこれからも生まれ、批判を受けながらも定着していくのだろう。

49　A（可能）は「ここだと見れないね」という方が文法的には正しい。――ラ抜き言葉に代表される若者の日本語の乱れは、次第に受け入れられ、主流となってゆくと思う。現在使われている言葉も同じように変わってきたのであるから。

C　ラ抜き言葉を、その一般化している現実という観点からとらえ、容認しよう、容認せざるを得ない、とする意見（一九例）

〔一年生〕

50　この言葉はいわゆる〝ラ抜き言葉〟であって、文法的には決定的に誤りのある言葉ではありますが、このような場合における誤解（可能と受身）は、このラ抜き言葉を使うことによってかなり減少します。日常生活において、このような使い分けは、現代では当然のようになされていて、ときにはテレビのアナウンサーでさえ使っています。日本語を正しく使用することは何よりも重要であると考えますけれども、このような誤解をまねく点を考えますと、やはり、ラ抜き言葉はその必要性から生まれた言葉であって、まちがっているからといって、これだけ広まってしまったものを正すのはかなり難しいことでしょう。

51 AとB（受身と可能）を比べてみると、Aの方（受身）が自然な言い回しではないであろうか。というよりも、私達の耳がラ抜き言葉に慣れてしまったためである。文法上においては両方とも正しいのではあるが、Bの方が不自然に聞こえてしまうということは恐しい事実である。しかし、この現状を誰にせき止められようか。

52 確かにラ抜き言葉というものは正しい言葉ではありません。しかし、今日の日本では、可能の表現にラ抜き言葉が一般のものとして使われているのです。正しくない言葉であっても、一般化すると、それが自然に使われてしまうということが、ここからわかるのではないでしょうか。

53 可能の意を言うとき「ラ」を抜くというのは、もちろん文法上の問題では大きな間違いである。これは世間からみて最も批判されるべきものだが、ここまで若者の間に普及されてしまった間違った言い方を、はたして誰がせき止めることができるのであろうか。

54 これは、世間では、現代の多くの若者が可能の意味で用いる時に「ラ」があるべき所で抜かしてしまうという「ラ抜き言葉」が流行しているからですが、間違いだと分かっていても、それを注意し、直す人がいないというのは、今の世の中、仕方のないことなのでしょうか。

55 可能の意味の時に生じるラ抜き言葉が一般に広まっている為である。これは、一部では非難されているが、現在の会話ではもう訂正することの出来ないものとなっている。

56 最近の傾向として、このラ抜き現象は非難されることも多くありますが、言葉を文化としてとらえる時、この傾向は誰にも止めることはできません。可能表現「――られる」は今や「――れる」のラ抜きのままで定着しつつあるのです。

57 ラ抜き言葉を批判する人は決して少なくないが、ベテランのアナウンサーや作家がラ抜き言葉を連発し、一般人にも定着してしまった昨今、これをなくすことはもはや不可能であろう。

58 日常一般的に、「ここだと試合が見れないね」というふうに、ラ抜き言葉で使われている。この表現は非難されることが多いが、一般に広まり、何の抵抗もなく使用されているものを、誰が止めることができようか。

59 このラ抜き言葉はよく非難されますが、この流れは誰にも止められません。

60 A（可能）の方は、これはよく非難されている事なのだが、「見れない」とした方が一般的だ。いわゆるラ抜き言葉である。

〔二年生〕

61 A（可能）の一般的な表現は、「ここだと舞台が見れないね」であり、可能の表現になる。――Aの一般的表現はラ抜き言葉であり、これは非難されているけれども、広く定着しつつある。

62 「画面が見れないね」、これはラ抜き言葉と言われており、正しい日本語とは言えません。しかし、ラ抜き言葉は一般的な言葉として使われており、いくら非難したところで、その広がりは止められません。

63 Aの「見れない」という表現は、いわゆるラ抜き言葉である。これ

は一般的に批判されているが、現代ではこの表現の方が自然で、定着しつつある。

64　「見れる」と言ってしまう方が自然であるし、楽である。ラ抜きであることに目クジラをたてなくてもよいのではなかろうか。

65　ここではA（られる・可能）が不自然である。正確には、Aは「ここだと景色が見れないね」となるべきだ。

66　Aの「られる」ははじめから可能の助動詞なので、「ら」が抜けても意味に変化はない、というより、「ら」がない方がより自然である。

〔三年生〕

67　文法的に見た場合、このラ抜き言葉は好ましくないものとして扱われる。しかし、日常のレベルで実際に会話をする時は、ラ抜き言葉の方がずっと自然に伝わることもあるのだ。

68　日常、私達が「可能」を表現する場合は、ラ抜き言葉を使う方が今では自然である。

d　ラ抜き言葉を、a～cのいずれかの面について述べながらも、結論的には否定しようとする意見（一三例）

〔一年生〕

69　しかし、今、「見れる」というように、可能の助動詞「られる」の「ら」が省かれて表現されることが多くなっている。つまりはこれがラ抜き言葉というものなのである。他にも「食べられる→食べれる」「着られる→着れる」のように、ラ抜き言葉は私達の日常生活において、さもこの表現を使うのが当り前のように誰もが使っているし、この表現が正しいと誤解されつつあるのである。しかし、これはラ抜き言葉といわれるように、本来、文法的にみてなくてはならない「ら」という語が省略された、つまりは誤った表現なのである。だから、A（可能・見られる）は不自然だと一般的には思われているが、これは本当は全く正しい表現なのであって、これが自然だと思えるようにならなくてはいけないのである。

70　このことから、現代の若者はラ抜き言葉を使うのではないでしょうか。「見れない」「食べれない」「変えれない」など、「――られない」というよりは、自分の意志が伝わるような気がします。しかし、ラ抜き言葉が実際はまちがった日本語であり、昨今の日本語の乱れの一端であることは確かですから、ラ抜き言葉は使用せずに、「――することはできない」と表現すればよいのではないでしょうか。

71　もちろん、A（舞台が見られないね）がラ抜き言葉で使われるのはよくないし、それが世間に広まっていることは問題である。

72　今後とも、この「られる」の意味を混同しないように、正しい日本語を使っていきたい。

73　しかし、「ら」をぬかした方のA（可能）の文は文法上、間違っていて、最近つくられてしまった言葉なのである。「ら」をつけた方が丁寧で、古風なイメージがするのではないかと思う。

74　このラ抜き言葉は言い易く、言葉の意味の取り違い（受身と可能と）

もないという利点もあるが、やはり、言葉本来の持つ使い方というものを無視してはならないと思う。自分個人としてはAとBの両方とも「見られない」と使っているが、時々、自然とラ抜き言葉を使ってしまうことが現状である。

〔二年生〕

75　現在、若者の間で使われる言葉にラ抜き言葉があります。それは日本語のひとつの乱れとして問題とされていますが、中には「ラ」を抜くことにより、可能と受身の区別がつくとして絶賛する方もいるそうです。どちらをとるかはその人の考え方や価値観によって左右されると思いますが、日本語を大切にしていくことは大切なので、私は反対（ラ抜き言葉に）したいと思います。

76　最近ではラ抜き言葉が出まわっていて、Aは「見れないね」と、「ら」の字を抜いてしまうことが当り前の様になっています。いつからこの様になってしまったのか、それはわかりませんが、同じ表現でも意味の違いがあるということを忘れてしまわずに、日本語の中の微妙な部分に触れてみることを大切にしていくべきではないでしょうか。

77　現代人の多くがラ抜き言葉を使うようになっていると批判している大学教授などを、最近、多く見かけるようになった。このような言葉の使い方では、後に言語というものが正しく残されなくなってしまうであろう。現代社会における言葉の問題というものが増えている今、私のような若い人々が言葉について考え、そして、言葉を大切にしていくことが必要であると感じた。

78　これは一般にラ抜き言葉と言い、現代の言語習慣となってきました。言葉はだんだん乱れてきてるようです。

79　以前、新聞に、最近の若者の「ら」言葉離れが取り上げられていた記事を見たことがございます。「――を食べる・――を食べられる・――を食べれる」、正しくは「――を食べれる」ではなく、「――を食べられる」。省略言葉が多くなったこの世の中、国文学科である者が、このラ抜き言葉にとまどい、困乱しております。誠に恥ずかしく、勉強不足を感じました。このままでは国文学科がかわいそうです。より一層精進していかなくてはならないことに改めて気づきました。

〔三年生〕

80　「正しい日本語ではない」と当初は随分反対もあったが、それを使う人が増えているのは、ラ抜き言葉によって二つの意味を分ける方がより分かりやすく、自然であると受けとめられているからだろうか。言葉は生き物であるとは良くいわれることだが、受身なら「見られる」、可能「見れる」という安易で機械的な言葉の使い方は、微妙な所で日本語の美しさを損なうものになりはしないだろうか。身近な問題であるだけに、一人一人が考えていかなければならないことである。

81　今、日本では、この「られる」の使い方が問題になっていることを新聞かテレビで見た。正しい日本語を使おうという姿勢が最近見えてきたように思う。

e　ラ抜き言葉を、日常の言語生活という観点でとらえ、a～cの意

見よりも積極的に肯定し、正当化しようとする傾向の意見（二三例）

〔表一〕の項目②に該当する者の意見はすべてここに入れた

〔一年生〕

82　なぜなら、〝見られない〟という言葉をラ抜き言葉にしてみると、〝見れない〟という言葉になり、これもまた可能を表す表現になるためである。そして、通常、可能を表す際は〝見られない〟よりも〝見れない〟と表現するのが適当である。よって、〝見られない〟という言葉は受身の表現にのみ用いるほうが現代語としてはふさわしいのではないだろうか。

83　しかし、A（可能）はB（受身）に比べて表現が不自然なので、「見れないね」と「ら」を抜かした言葉、ラ抜き言葉を使った方が正しいと思います。

84　イ段動詞につく場合、受け身の助動詞は「られる」で正しいのだが、可能の助動詞の場合、イ段動詞に関しては「れる」で良いのである。

85　A（可能）の方は表現の視点が「自分」にあるので、正しくは「見れないね」、又は「見えないね」になるべきです。

86　B（可能）のどこが不自然かというと、「見る」行為が不可能なわけであるから、「見ることができない」つまり「見れない」という表現にしなかったところに問題がある。「ら」はこの場合、不必要であるというわけだ。

87　A（可能）には最近話題になっているラ抜き言葉が使用されており、「見れない」という表現が適当である。

88　A（可能・られる）の方は、日常の表現からすると違うと思われる。現在では、Aの表現は「見れないね」というラ抜き言葉が主流になっているのである。

89　A（可能・られる）の表現には、他人によってではなく、自分にとって可能なのか不可能なのかを表さなくてはいけません。そのため、ラ抜き言葉である「見れない」を使うのです。

90　B（可能・られる）は、〝ここだと映画見れないね〟とするべきだ。ラ抜き言葉にすると受け身でなくなり、自然になる。

91　冒頭の表現は、自然に解せば、Aのような可能の助動詞の意味でなく、Bの受身の助動詞の意味に解釈するのが正しい。なぜそのようになるかは、「ラ」という文字の侵出によっておこる。つまり、ラ抜き言葉にすると、「ここだと見れないね」という表現になり、自然と可能の助動詞の意味に解釈することができるのである。

92　この場合、「見られない」の「られ」は可能であるが、「られ」ではなく、「れ」だけで「見れない」と、「ら」を抜いた方が直接的で自然である。このように、ラ抜き言葉にした方が自然なことが多い。

〔二年生〕

93　A（可能）の「見られないね」という言葉は、――ここでは不自然である。ここでは「見れる」といった可能の意味を持ったラ抜き言葉が自然である。

94　A（可能）では、自分から自分以外の対象となる物に視線を発して

おり、この場合、「見れないね」というべきものである――。

95 Bは可能表現であり、「ら」が抜けても意味は変わらず、かえって「ら」が入るのは不自然で、混乱をまねくものになってしまいます。

96 この場合（可能）は、「見れない」と、「ラ」を抜いて使用する方が自然だと言えます。

97 自分が動作主であるのですから、「見られない」と表現するより、「見れない」と表現するのが正しいのではないでしょうか。

〔三年生〕

98 本来は、「ここだと中の様子が見れないね」というラ抜き言葉を使うのが正しい。

99 「映画が見れない・ぶたいが見れない」といった時は、「見られない」のラ抜き言葉「見れない」を使うべきだ。

100 「ここだとおりの中のパンダを見れないね」と、視点を見る側においた表現とするべきではないか。

101 自分が見に行っているということなら、A（ここだとラモスが見れないね）のラ抜き言葉を用いた方が文法的に成り立つのではないだろうか。

102 「ここだとテレビが見れないね」というラ抜き言葉にすることによって、ずっと自然な文章となる。

103 「ここだと見れないね」、このようにすれば、見る事ができないということが明確となる。このラ抜き言葉によって文章がわかりやすくなる。

〔四年生〕

104 ――「見れない」となるので、ここではラ抜き言葉で考えるのが妥当だと思われる。

四　本稿のまとめとして

学生が「ラ抜き言葉」について調べるとすれば、まず辞書ということになるだろう。

『広辞苑』（第四版・平成三年）には「見れる」「来れる」などは掲げられていない。しかし、『日本国語大辞典』（小学館・昭和四七～五一年）には、「見れる」「来れる」は見出し語に立ててある。

み・れる《見》《ラ下一》（「みる（見）」の可能動詞）見ることができる。本来「見られる」であるが、五（四）段活用からできた可能動詞「書ける」「帰れる」などにひかれてできたいい方。※子をつれて〈葛西善蔵〉一「これほど手入れしたその花の一つも見れずに」

※二十歳〈川端康成〉「銀作は一家を離れて見れるやうになってゐた」

こ・れる《来》《ラ下一》（「来る」の可能動詞）来ることができる。本来、「来られる」であるが、五（四）段活用からできた可能動詞「書ける」「帰れる」などに引かれてできた言い方。※雪国〈川端康成〉「よそを受けちゃった後で、来れやしない」――略――

また、『大辞林』（三省堂・昭和六三年）にも、「見れる」「来れる」が掲げられている。

み・れる[2]《見れる》（動ラ下一）上一段動詞「見る」の可能動詞で、五段動詞「書く」「読む」の可能動詞「書ける」「読める」などからの類推でできた語。本来は「みられる」というべきもの。見ることができる。「舞台はここからでもよく――・れる」

こ・れる[2]《来れる》（動ラ下一）来ることができる。五段動詞「書く」「読む」の可能動詞「書ける」「読める」などからの類推でできた語。「こられる」が本来の形。

右の項目を学生が読めば、「ラ抜き言葉」が昭和時代以前に文学作品にすでに登場することができる力をもっていたものであることが分かるはずである。学生の意見には、「ラ抜き言葉」がいつから使われるようになったかは知らないがとか、また、あたかも自分たちの年代の者が使い出したかのような述べ方や、子供や若者を中心に使っているとかいう述べ方をしているが、その点、認識不足を感じる。

また、「ラ抜き言葉」が五段活用動詞から派生した可能動詞「書ける」「読める」等との類推によって生じたものであることも分かるはずである。「書カレル：書ケル＝見ラレル：x」である。そこから、可能動詞が五段活用と対応するもの以外にあってもよいのではないか等の疑問が出てもよいはずである。学生の中で、「ラ抜き言葉」を、「可能動詞として認めても良いのかもしれません」と、「可能動詞」という語を用いてきちんと述べている者は一名だけであった（22番の意見）。

また、両辞書ともに、説明の中に、「本来は「みられる」というべきもの」というような但し書きが付いている。この点から、大体五段活用に付くはずの「れる」が一段動詞やカ変動詞に付いていて、これが文法的に誤用といわれる理由だということにすぐ気付くはずである。また、そのような但し書きを付けながらも見出し語として立てないわけにはいかなかったという背景、つまり、例外的に見出し語に立てなくてはならなかった事情についても、学生は考えてみることができるはずである。そして、そのような疑問は次のような形でまとめることができるだろう。すなわち、どうして「見れる」「来れる」だけを見出し語に立てるのか、――どうして「着れる」「寝れる」「起きれる」「食べれる」「出れる」「居れる」「投げれる」「逃げれる」などは見出し語に立てないのか。そうすると、同じ「ラ抜き言葉」でも、すでに一般化しているものは正式に認められて、まだそれほどではないものは認められないのか、という疑問も生じてくるはずである。つまり、「ラ抜き言葉」を認めるとしても、広く一般化した語だけを認めるのか、それとも、一段動詞やカ変動詞などに「れる」の付くことを認めるのか、といった問題である。それとともに、『広辞苑』では「見れる」「来れる」などは、改訂版でも掲げていないという問題を考え合わせてみることもできるであろう。学生の意見には、こうした問題に言及しているものは無かった。

このような現代語の問題について学生に話す時、筆者はその切っ掛けとして、まず『言葉に関する問答集』（文化庁）をとりあげることが多い。その第一集（「ことば」シリーズ3・昭和五〇年）には［問38］として、

「最近「見れる」という言い方をよく耳にするが、「見られる」の方が正しい言い方ではないのか」という問いと、答えが掲げられている。答えから要点を掲げてみよう。最初に、「見れる」等の言い方は従来は間違った用法とされ、それは、可能動詞は四（五）段動詞から派生するものに限って認められているから、また、「られる」でなく「れる」を用いているからである、という説明があり、続いて次の記述に入る。

したがって、小・中学校の国語教科書などでは、本文中に「見れる」「来れる」などを使用した例はなく、またほとんどの国語辞書においても、「見れる」「出れる」などを公認したものはない。（ただ、わずかな例外として、比較的最近に出た一、二の辞書では、「来れる」を独立項目として掲げ、川端康成の『雪国』の用例「よそを受けちゃった後で、来れやしない。」を引用したものがある。これは「来れる」を「来る」に対する可能動詞として正式に認めたことを意味している。）

また、次のような新聞の用例を掲げている。（年月日は示していない。「最近では」としている）

○　猛獣がゆっくり見れる　上野動物園　新居ができました　（新聞見出し）

○　一着で二通りに着れる　ウイークエンドのおしゃれ着（新聞広告）

また、アンケート調査として次の例を掲げている。

なお、やや古い資料だが、国立国語研究所が昭和三十年度に国語研究者や有識者を対象にアンケート調査を行い、ゆれている語形について、そのどちらを採るか、また、その理由について具体的に答えてもらったものがある。その際の問題語の中に「見られなかった・見れなかった」が含まれているが、その結果は、前者を採る方が絶対多数であったことが報告されている。

それから三八年後の調査、つまり、今回の学生の意見では、「見れなかった」を採る方が絶対多数であったということになるわけである。ただし、対象が一方は国語研究者・有識者、他方は女子大生という違いはあるが。

また、答えの結びは次のようになっている。

以上、「見れる」「来れる」などの言い方がますます一般化している現象は否定出来ないとしても、学校の教科書や国語辞書の取り扱い方、知識人の言語意識などからすると、まだまだ標準的な言い方として位置付けられる段階にまでは至っていないように思われる。

これは、「ラ抜き言葉がやがては標準的な言い方として位置付けられる段階に至るかも知れない」ということを示唆する見解であると言えよう。そして、「ラ抜き言葉」が広く一般化し、批判の余地の無いほど定着した結果、標準的な言い方として認められるためには、認める側としての小・中学校の国語教科書や国語辞書の態度、また、知識人の言語意識などが決め手になるという見解である。これには、言外に「国語審議会」があるのであろうことは言うまでもないことである。「知識人の言語意識」という表現でそれを示唆しようとしているのかも知れない。こ

の表現は、表面的には前掲部の「国語研究者や有識者」を受けたものではあろうが。

ところで、いずれにしても、誰が認めるにしても「ラ抜き言葉」が標準的な言い方とし認められるのは「時間の問題のみ」ということであり、この基本的な考え方は健全であり、自然な（無理のない）考え方であると言えるだろう。

だが、こうは言っても、筆者は「規範意識」の存在まで否定しようとするわけではない。「ラ抜き」を言葉の変化としてとらえれば、それと「規範意識」とは表裏の関係にあるものである。言葉の変化は規範意識の呪縛、すなわちそれを引き止めようとする保守的な力から容易には逃れがたいものである。もし、「ラ抜き」が強い生命力を持つものであれば（それを持っているようだが）、規範意識の力を振り切って生きてゆくことになろう。この意味で、「ラ抜き」が標準的な言い方として認められるには「時間の問題」があるということなのである。このように、筆者はごく平凡に考えているだけである。有名な例なのでことさら言及するのにははばかられるが、『枕草子』で清少納言が、助動詞「むず」の登場について、「――いとわろし。まいて文に書いては言ふべきにもあらず。」と非難したが、この語は規範意識の力を振り切る強い生命力に支えられていた。

なお、学生の一〇四例の意見では、「ラ抜き」を容認する、しないにかかわらず、規範意識的言辞、たとえば「正しい日本語」「日本語の乱れ」「非難されている表現」等々のような意味合いの語句を用いて論述している者は七〇名以上に及んでいる。

最後に付け加えると、この第四章は国語学研究者の方々には必要の無いような内容のものであるが、筆者には、意見を書いた学生のことが念頭にあり、学生を読者と想定して、つい、書かざるを得なくなったものなのである。この点、ここにおことわりしておきたい。

なお、この課題の誘導的性格によって、学生の意見には「可能」と「受身」の対比を観点として述べた者が多くなったのであろうと思う。「ラ抜き言葉」がなぜ「誤用」と言われるのか、また、一般的に用いられているのに「誤用」とはどういうわけか、それについてどう思うか、とか、また、認めるとしても、「れる」が付くという文法的な点を認めるのか、それとも語によって判定するのか、というようなテーマで論述させれば、おのずと意見の様相も変わってきて、この第四章で言及したいくつかの問題点などについても論じられることがあったかも知れない。しかし、いずれにしても、結果的には、「ラ抜き容認八〇％台」という傾向には、おそらくあまり変動が無いのではないかと思われる。変動があったとしても、容認が五〇％以下になるようなことは無いであろうと思われる。

昭和初期のネス湖の怪物はどうやらウソだったらしいが、この怪物、いや、この生物は、その頃から着実に子孫を増やし続けているようだ。もっとも、前者は古代生物の幻影、後者は確実に生存する新生物ということになるが。

おわり